

## ●88カ所の霊場を勧請

天孫降臨の伝承を伝える高千穂町・穂触（くしふる）神社のふもとを奥に進むと、浅ヶ部地区に入る。焼山寺（しょうざんじ）山（七九六メートル）のふもとに広がる八十八戸の集落である。

国の重要無形民俗文化財である「高千穂の夜神楽」を伝承している地区の一つでもある。神楽は集落によつて、三十三番の番付や舞振りに多少の違いがあるが、浅ヶ部神楽は、先人たちの努力で手堅く伝承されている。

ここでは焼山寺山一帯に、四国八十八カ所を勧請、今も丁寧な縁日の祭りが続けられている。

天保四（一八三三）年、この村の甲斐常吉、興梠伝兵衛ら五人が、四国八十八カ所の巡拝に出かけた。彼らは本山の土を持ち帰り、二年がかりで八十八カ所の霊場を勧請した。八十八体の弘法大師の石像は、現在の延岡市舞野に住んでいた石工・利吉の作である。この中で一番札

所に立つ供養塔は高さ約四メートル。石工・利吉の信仰心のほどがしのばれる。

延岡まで、当時は十四里一丁余といわれていた。約五十六キロである。利吉は浅ヶ部に二年間仮泊しながら、石仏を刻んだことになる。

一番札所から、集落の中を順に参り、焼山寺山の高所まで参拝するには二日かかる。しかし、参道はお参りする人の好みに合わせて、自由に選択できる。お大師さまは慈悲深いのである。

縁日は旧暦の一月二十一日、三月二十一日、七月二十一日の年三回。この日に巡拝すると札所の茶屋（お堂）から「よらっさんの」（お寄りなさい）と村人の声が掛かる。そしてお接待の食べ物、茶が振る舞われる。

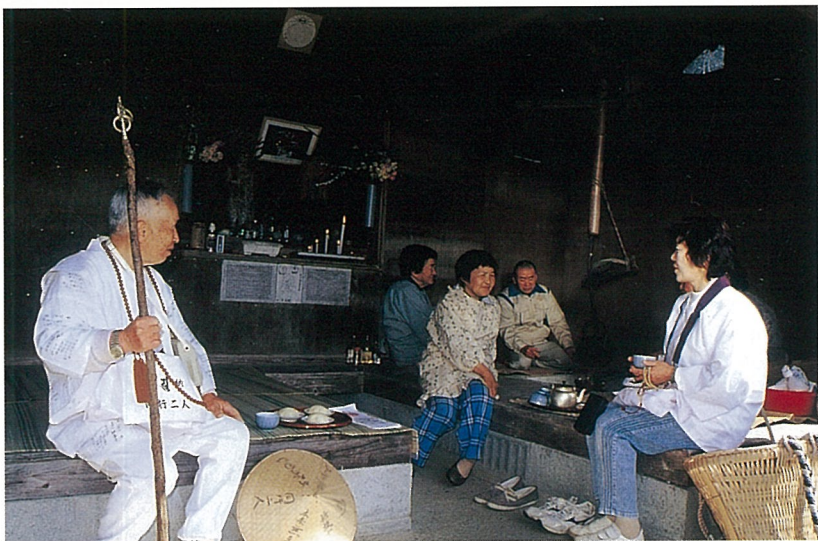
この日は、里道の各所にのぼりが立ち、巡拝者とお接待の村人でにぎわう。夜神楽のときもそうだが、このときも村人の律儀な信仰心と、

長く培われた穏やかで善良な心が伝わってきて、現代人が忘れかけているものを、浅ヶ部の村里は呼び戻してくれる。

里道には、あちこちに庚申（こうしん）塔が立つ。庚申の日に帝釈天を祭る民間信仰が、受け継がれていて、今も一番札所の辺りでは、村人によつて無病息災を願う庚申の夜のたき火がたかれる。

高千穂峡や雲海の景観もさることながら、静かな山里に伝承されている「癒やし」は、訪れる人々にとって大切なお土産である。高千穂が誇るこのできるもう一つの顔である。

碓井哲也



45番札所。岩屋寺の縁日。訪れる人に癒やしを与えてくれる